

| | |
|------|---------------|
| 研究区分 | 教員特別研究推進 教育推進 |
|------|---------------|

| | | | | | |
|-------|-----------------------------------|---------|---------|-------|--------|
| 研究テーマ | これからの時代で求められる高機能シミュレータを用いた教育方法の検討 | | | | |
| 研究組織 | 代表者 | 所属・職名 | 看護学部・教授 | 氏名 | 田中 範佳 |
| | 研究分担者 | 所属・職名 | 看護学部・教授 | 氏名 | 山田 紋子 |
| | | 所属・職名 | 看護学部・教授 | 氏名 | 林 みよ子 |
| | | 所属・職名 | 看護学部・講師 | 氏名 | 前野 真由美 |
| | | 所属・職名 | 看護学部・助教 | 氏名 | 鈴木 郁美 |
| | | 所属・職名 | 看護学部・助教 | 氏名 | 中岡 正昭 |
| | | 所属・職名 | 看護学部・助教 | 氏名 | 長谷部 美紀 |
| | | 所属・職名 | 看護学部・助教 | 氏名 | 植田 春美 |
| 発表者 | 所属・職名 | 看護学部・教授 | 氏名 | 林 みよ子 | |

| | |
|------|--------------------------------------|
| 講演題目 | これからの時代で求められる高機能シミュレータを用いた教育に関する文献研究 |
|------|--------------------------------------|

研究の目的、成果及び今後の展望

本看護学部・成人看護学領域では、長年にわたって、高機能シミュレータを用いたシミュレーション教育を行なっている。これまで一定の成果をあげていると評価するが、わが国の看護学教育におけるデジタルトランスフォーメーション化が推奨される現在、これまでの教育を見直す必要があるのではないかと考えた。そこで、次世代の看護職者を育成するための高機能シミュレータを用いた教育の方法や内容について、先行研究を手がかりに検討することを目的とした。

医学中央雑誌 Web 版、PubMed、Google Scholar を用いて、「シミュレーション」「高機能シミュレータ」「教育」「看護」をキーワードとして 2020 年以降の文献を検索、検討した。

看護学教育におけるシミュレーション教育は、リアルな状況変化を再現することで、擬似体験によるイメージ化の促進、気づきを得ながらの自己の実践の振り返り、実践を繰り返すことによる学習の深まりを体験させ、学生の対応力・判断力・技術力の向上に役立ち、臨地実習では学習し難い内容を補完する教育方法であると言える。一方で、このような成果をもたらすシミュレーション教育には、指導教員のデブリーフィング力の関与が指摘されている。わが国の目指す Society5.0 では、探究心・主体性・学び続ける姿勢の強化、対話を通じた納得解の形成、対話を通じて納得解を形成する、正解がない新しい価値創造・イノベーション創出を可能にする人材育成が求められている。リアルな医療現場での看護経験のない学生が、実践を振り返って行動の裏づけとなる知識を深めていくことは難しく、教員が方向づけしがちである。しかし、そうして考えることやそのプロセスことに意味があると考えられ、教員がその点を十分に理解してデブリーフィングを行えるよう、教員同士のデブリーフィング指導のデブリーフィングを並行して行う必要があると考える。

また、シミュレーション教育は、臨地実習の教育効果と引けを取らないという報告がある。しかし一方では、仮想空間や AI などデジタル化が進む現代社会において、人と人との良好な関係構築を土台とする医療者の育成においては、生身の人がかかわらなければならないところを見失わないシミュレーション教育をすべきであると警鐘を鳴らす研究者もいる。シミュレーション教育の利点である繰り返し経験し考えることができることに加えて、シミュレーション教育の欠点である実践に対する対象の反応を捉えた双方向の体験の不足を補うことが期待できる、教育された模擬患者への実践と組み合わせることが効果的であることが示唆された。